とより慕闍なるものが其の宗教の僧侶なるを知るべく、而して經に諸慕闍と云ふよりして考がふれば此の語に僧侶の意あるを推すに難からざるべし、然も果して之れが如何なる語を寫せるものなるかに就いては、今明らかに知る所なし、マニ教僧侶の階級に就いては、東方の史料、即ち新疆發見の史料によれば、dintar; M(a) Vistak; 等の名のありしことは知り得れど、未だ慕闍に相當するものを見ず、西方の史料によれば、其の長老を Majores と云へりとし、(Baur: Das Manichäische Religionssystem s. 207.; Früge1: s. 370) 更に一般に其の僧侶を呼びて Muschammasûn と云くりと、(Flügel. s. 294.) されど何れも未だ充分なる緣故を索むるに足らざるべし。而してかの慕闍拂多誕、法主慕闍拂多誕と經に記せるものに就いても、亦一考せざる可らず。

抑も此の殘經一篇は支那に於て撰述せられたるものに非ずして、必らず飜譯せられたるものなるべきは、人の否まざる所なるべし、此飜譯の經中に於て、彼の武后の延載元年に、唐にマニ教經典を齎らしし人の名として擧げられたる拂多誕なる文字を、二箇所に及びて迄も認むるを得ることによりて、吾人は次の三條件を規定し得べし、即ち一は此經は拂多誕の本國なる波斯に於て選定せられたるものなること、二は此經は拂多誕が其本國に在りし時代、即ち延載元年（西紀六九四）より少しく以前に當る或年より以後に著はされたるものなること、三は拂多誕は既に其の本國波斯にて、マニ教の法主なりしこと是れなり、而して此の如きはもとより拂多誕を以て、從來學者の見たるが如く人名と解釋するによりて生ずべき結果なりとす、若し拂多誕が人名に非ずして或はマニ教僧侶の一階級の名稱の如きに比定し得べくんば、如上の見解はもとより成立し得べきに非ず、而して此の如き比定は必らずしも試み得られざるに非るべし、由來支那に於て人名の如く記さるゝ外國人の名の如きは、屢々其官職の名にすぎざ